

連載「誰も書かなかった GIS」第 12 回

空間情報処理界の個性派

(株) エヌ・シー・エム 代表取締役社長 柳田聡 (やなぎだ さとし)

1982年東京大学工学部土木工学科卒業。同大学院修士，博士課程を経て1985年より現職。工学博士。専門は画像処理及び地理情報システム。

1 はじめに

パソコン界では時々、業界の内幕の暴露本や人物列伝が出版される。例えば、「コンピュータ帝国の興亡(上下)」(ロバート・X・クリンジリー著、アスキー出版局刊)や、「実録！天才プログラマー」(マイクロソフトプレス編、岡和夫訳、アスキー出版局刊)などは、昔ニヤニヤしながら又は深くうなずきながら読んだ記憶がある。これらの暴露本は確かに面白い。どこまで本当なのか疑問もあるが、パソコン界を引張って来たリーダー達の価値観なり文化、考え方などの雰囲気やビビッドに伝わるのである。そう言えば、「仮にあるエピソードが真実でなくても、そこからもたらされる結論が真実であるならば、一体何の問題があるのだろうか？」という意見をかつて聞いたような気がする。

ひるがえって私が仕事をしている周辺にも、つまり GIS なり、リモートセンシング(人工衛星画像を用いて地表面の状態を調べる技術)なりの分野においてもユニークな人、興味深い方は一杯いらっしゃる。「そうだ今回は雑誌記者になって、私の周囲にいる空間情報処理界の個性的な人達について書いてみよう。僕だって雑誌記者になれるんだ。」(そう言えば、「コンピュータ帝国の興亡(上下)」によれば、あのビルゲイツの精神の基本は「僕だって何々が出来るんだ。」と言うものであったそうだ。私とゲイツを比べても、持てる富の点でも頭の良さの点でも、全く比較にならないのだが)以上のように考えたのが、今回の企画の由来である。

今回取り上げるのは、空間情報処理界(なぜ GIS 界と言わずに、わざわざ「空間情報処理界」と言うまどろっこしい用語を使うかと言うと、今回取り上げる方の中には GIS というよりは寧ろ、リモートセンシングを専門とする方もいらっしゃるからである。私としては、不正確な分類は慎みたい)におけるビジョンを持つ人(ビジョナリーとでも言うのだろうか?)夢を持つ人或いは、強い技術志向の考え方を持っている人達である。そして結果として、その個性で私に影響を与えて来た人となっている。

無論、ここに掲載した方以外にも優秀な方、面白い人は業界には一杯居る。例えば大学院において、私の指導教官であった教授もその内の1人である。ただその恩師は余りに業界では有名すぎ、余りに偉すぎ、結果として恐れ多くて私にはここでは書けない。また紙面の

限界や私の交友範囲、或いは交友の深さの限界と言う問題もある。従って今回は、ここに掲げる3人の方に限定させて頂く。悪しからずご了承頂きたい。

ここに登場する人達の氏名は全て実名である。しかし、会社名はあえて伏せさせて頂いた。これは、この方達が、所属する会社組織とは全く関係無く個人として私に影響を与えて来たからである。社名を出さなかった代わりと言っては何だが、写真の拝借をお願いし、御許可頂いた方については、掲載している。私の文章力の不足を写真で補って頂ければ幸いである。中には写真を拒否された方もいらっしゃるが、更に極端な場合になると、ここへの掲載自体を拒否なさった方もいた。たとえ匿名でも許して頂けなかった。書きたくてたまらなかった人なのであるが、今後の交友関係にひびが入ることを考えると、さすがに私も執筆を諦めざるを得なかった。そう、個性派とは言っても、必ずしも皆が目立つことを望んでいる訳ではないようだ(PC界の目立とう根性旺盛な住人とは違うなあ)

2 柳田のルーツの松岡氏

トップバッターは、私が私の人生において一番影響を与えたと考えている松岡氏である(ただし大学院の学生だった頃の指導教授を除く)。松岡氏は、と言うか私にとっては「松岡さん」だが、学生だった頃私が所属していた研究室の助手をなさっており、専門はリモートセンシングであった。私が大学院に居た5年間のうち、最後の1年を除いて4年間はみっちりお付き合い頂いた。その意味で私のルーツみたいな方で、本人はどう思っているかわからないが、結果的に、似た者同士になってしまったような気がする(御本人は、これ聞いたらイヤがるだろうなあ)

松岡さんには、理屈をこねる楽しさと難しさ、或いは理屈をこねなければいけない必要性みたいなものを、しっかりと叩き込んで頂いた。本連載において、私が、GIS について分かったような分からないような理屈をグダグダこねるのは、そうこれは実は全て松岡さんから受け継いだ性癖である。

松岡さんに関するエピソードは、今でも幾らでも思い出すことが出来る。先ず技術の基本的なポイントを教えて頂いた。リモートセンシングにおいては、「土地被覆」という用語があるが、この用語の大切さを叩き込んで下さったのが松岡さんである。例えば、宇宙からコンクリートの建物が観測されたとして、その建物が住宅なのか商店なのかは、宇宙からの目だけでは分からない。つまり正確な「土地利用」は、リモートセンシングだけでは分からないということである。リモートセンシングで分かるのは、土地の物理的状態である「土地被覆」なのである。この両者の概念を厳密に区別しなければいけないことは、リモートセンシングの出発点とも言うべき基礎知識である。

一方、リモートセンシング技術を用いて、土地被覆の変化を求めることがしばしば要求される。例えば森林面積の減少を調べたいとか、住宅地の増加を分析したいなどと言う要望が一例である。この時意外なことに、人工衛星画像の幾何補正の精度が重要なポイントとなる。(図1参照)

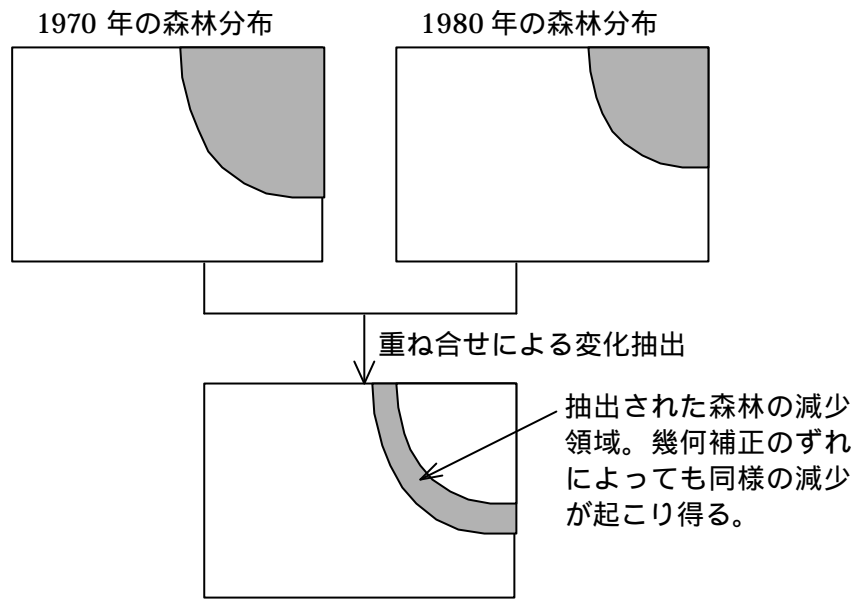


図1 土地被覆変化抽出における幾何補正精度の重要性

このように二時期の土地被覆画像を比較した場合、たとえそこに変化があったとしても、それが本当に土地被覆の変化なのか、それとも幾何補正の甘さから来る変化なのか、区別がつきにくいからである。この様な、技術の落とし穴と言った、重要なノウハウを松岡さんからみっちり教わった。これらは、今日でも仕事の役に立つ基本的事項である。

松岡さんの緻密な論理構成力が発揮されるのは、何も仕事だけではなく、日常生活における細かな選択においてもその能力は発揮されるのである。その一例が、電車で移動する場合の経路選択である。例えば、研究所があった千代田線の乃木坂駅から東京駅に行く場合には、複数の経路が考えられる訳であるが、「こう行くとお金は安いが歩く距離が長くなる。」とか、「こう行くとお金はかかるが時間は短くなる。」とか、各々の手法に対してメリット、デメリットを緻密に整理した後、「だからこうするべきだ。」と言う結論を整然と導き出すのである。学生時代の私にとっては、松岡さんが随所に見せる、うっとりしい位の緻密な論理構成力と言うのは脅威の的だった。

口癖も強く印象に残っている。何かと言うと「基本的発想として」と言う用語を連発していた。「物事を考える際においては、先ず基本的筋道が大事なのだ。」と言うことを強調なさりたかったのだろう。お陰で、私にも一時期この口癖が移ってしまい直すのに苦労した。

技術者として、自分の財産を積み上げることの重みも教わった。その当時画像データは、主に磁気テープでやり取りしていたのであるが、ある日某測量会社からもらって来た磁気テープが読めないと言う事件が発生した。要は、通常磁気テープにおいて画像ファイルのレコード長は一定なのだが、なぜなら通常の画像の1ライン当たりの画素数は画像内で一定だから、何らかの不具合か或いはそれが仕様だったのかは分からないが、長さがバラバラなレコードが画像データファイルに記述されていたのである。これでは、当時研究室にあったユ

ーティリティのプログラムはお手上げである。その時松岡さんは、御自身がかつて書いたソフトを溜め込んである磁気テープから、不定長データを読み込めるプログラムをさっと取り出して、問題となっているファイルを処理して下さった。当時は個人が自由に使える磁気ディスクの量も十分に無く、自分が開発したプログラムでも使用頻度が落ちたと思ったら、即座に磁気テープに吸い上げないと、ディスクが一杯になってしまったのである。その松岡さんが取り出した磁気テープに含まれている、プログラムの本数の多さを見て私は度肝を抜いた。それと同時に、開発プログラムの量がそのまま我々のキャリアになっていく、システム開発者と言うお仕事の業を見たような気がした。ちなみに、この不定長レコードを処理するプログラムは PL / I 言語で書かれており (PL / I でないとレコードの長さの検知が出来なかった) この経験が後に私に PL / I を勉強させることになる。

「民間に一度は出たら。」と言うアドバイスを下さったのも松岡さんだった。要は、工学の世界においてはずっと大学に居るよりも、一度民間の水を味わった方が、キャリアアップには都合が良いんじゃないかと言うことである。私が今の会社に入ることを選択したのも、このアドバイスがあったからこそである。松岡さん自身も、このアドバイスの後、民間の測量会社に行かれた。自分としては、非常に良いアドバイスを頂いたと思っている。

在学中どちらかと言うと、怒られたり或いは、考え方の誤りを指摘され続けた私であるが、唯一誉められたのが英語力である。当時私が在籍した研究室では、外国人留学生なり、外国人の先生を迎えることが多かったので、英語は彼等とのコミュニケーションの為に必須技術になっていた。私は何事もやり出したら凝り出す方なので、3ヶ月の努力の後、何とか一応のコミュニケーションを取れるようになったのだが、松岡さんから見るとそれが上手い英語に見えたのだと思う (実際は全く上手くないのだが。逆に言うと松岡さんの英語力が...これ以上はいくら僕でも書けません)。松岡さんにとって自分は子分である以上、誉められることは絶対に無いと思っていただけに、非常に嬉しかった。と同時に、やっと少しは親分を見返せたのかとホッとした記憶がある。

でも、今思い出しても笑ってしまうのは松岡さん自身、非常に負け惜しみが強くて中々素直になれない。その時、何と言っていたかと言うと『『デジタル人間は、英語が不得意なもの相場が決まっているのだ。』と東海大の先生と意見が一致した。』と屁理屈をこねていた。ある意味で、かわいい人である。

以上のエピソードについて、多分御本人は忘れていらっしゃるだろう。忘れて下さって良いし、かつそれが当然なのだ。しかし、教えを受ける立場だった私には、鮮明な記憶として残っている。そして、それらの思い出が確実に、今の私を形作っている。教育にも色々なやり方があるのだと言うことの良い例かもしれない。

3 情熱と高い夢の櫻井氏

櫻井氏とは、氏が某超大手計算機メーカーの部長であった時代に、仕事の関係でお会いしたのが最初である。都内の巨大オフィスビルの一室でお会いした氏は、恰幅が良く、自信

に満ち溢れた様子で、如何にも巨大企業の部長といった風情であり、一目で圧倒された記憶がある。当時、この会社はパソコンの進歩に乗り遅れたと言うのが世間一般の評価だったが、「うちはダウンサイジング大歓迎だ。世間の見方は間違っている。」と早速吠えられた（それはまさに吠えるが如くの迫力であった）ことをはっきりと覚えている。巨大企業の重役は強気でなければいけないのだと感じ入った次第である（でもどう考えても私には、強がりに思えたのだが）

櫻井氏をここで取り上げた第一の理由は、GIS にかける情熱が凄まじく、GIS の可能性を極めて強く信じていらっしゃるからである。或いは別の言い方をすると、GIS が好きでたまらないということになるのかもしれない。好きがこうじて GIS に関する本もお書きになったし、会社まで変わってしまった方である。私何ぞは GIS の限界、問題点を考慮しつつ、冷やかに GIS を眺めてしまうのだが、櫻井氏はとにかく熱いのである。自分の冷めた態度を思わず反省させられてしまう方である。

櫻井氏の GIS にかける情熱は、氏がお書きになった「GIS / 電子地図革命」(東洋経済新報社)に詳しいが、要は GIS は世の中の色々な問題を解決出来る、強力なツールであると考えていらっしゃるのだ。本の中で櫻井氏は、GIS の利用例として、交通事故分析がより正確になることを取り上げていらっしゃるが、要は「もっと GIS が使えるのでは。」「GIS は社会の様々な問題の解決にもっと役立つのでは。」「GIS が未だ十分に使われていないのは我々の努力が足りないからでは。」と言う問題意識をお持ちなのだと思う。その意味で、私自身も櫻井氏とお話ししていると、仕事への意欲が湧いてくる。

櫻井氏に感服する第二の理由は、GIS 導入 / 構築のためのマネジメントのプロと言う能力をお持ちな点である。つまり組織をどう動かして GIS を、導入、構築していくかと言うことに関して、強力なノウハウをお持ちなのである。これは櫻井氏の経歴がなせるワザなのかもしれない。ここで組織と言うのは、GIS を構築するベンダー（開発業者）と顧客の双方を意味する。まずベンダー側と言うならば、以前櫻井氏の部下の方とお話ししたことがあるのだが、氏は仕事には厳格で、下に付いているものは非常に鍛えられるそうである。実際に私も「は仕事が遅い。」と部下の手綱を締めていらっしゃる現場を目撃したことがある。余談ながら、私は学校を卒業する前に社長になってしまったおかげで、幸か不幸か上司に絞られた経験がない。私の父はそれが不満であるらしく、いつも、「お前には上司に鍛えられると言う経験、ひいては社会常識が欠けている。」と文句を言う（そう言われても困るのだが。更に余談ながら、父には社会常識がありすぎるのではないかとも思う）。よって私は実は、一度は櫻井氏に鍛えて頂きたいと言う密やかな願望を持っている。

顧客側の GIS 導入体制作りにも、独特のノウハウを持っていらっしゃる。この辺のことも、上記の本には詳しいが、こちらには初動の組織構成から、ミーティングの開き方の細かなノウハウに至るまで、貴重な情報が満載されている。私も読ませて頂いて非常に参考になった。

櫻井氏は現在、EarthFinder という GIS 製品の拡販に情熱を燃やしている。更に、つい先日「近い将来、地図データの流通に関する新規事業を始めるんだ。」と教えて頂いた。GIS の普及に向けた事業エネルギーは、常にダイナミックで尽きることがない。今後の GIS の更なる発展の為に、どのような手を打っているか、極めて興味を持って私は眺めている。

4 アイディアと高い理想の白尾氏

私が、白尾氏といつどういうきっかけで知り合いになったかは、実は記憶が定かではない。記憶にある限りでは、1990年の筑波での ISPRS（国際レベルの写真測量とリモートセンシングの学会）のシンポジウムの際に、筑波のピザ屋でお話したのが一番古い会合である。

私がここで白尾氏を取り上げた第一の理由は、新しいビジネス形態へのアイディアが豊富で、かつ GIS コンサルタントと言う新しい業務形態に果敢に挑戦なさっているからである。白尾氏は現在、GIS コンサルタントに特化した会社を立ち上げて、その社長をしていらっしゃる。日本のパソコン地図システムの草分けとも言えるマッピングシステムの開発会社の部長と言う要職を惜しげも無く捨てて、一匹狼として GIS コンサルタント業に挑戦していらっしゃる。その意味では、ここに掲載した3名の方の中で、唯一個人と会社を同一視しながら、お付き合い出来る方なのかもしれない。

GIS コンサルタントについては、しばしばその必要性が指摘されながらも、特定メーカーに片寄らない、中立的な立場のコンサルタント業と言うものは、まだ十分確立されていないのではないと思う。その意味では、白尾氏の挑戦は画期的であり、私自身も興味深く見守っている。

白尾氏とお話していると、新しいビジネス形態への豊富なアイディアと柔軟性を強く感じる。例えば、コンサルタントと言うと使う側にとっては、極めて高い出費を要求されるのではないかと恐れるかもしれないが、白尾氏の場合は月数万円と言う、これまでの常識を破る金額での契約も受け付けていらっしゃる。要はお客様が払える金額に応じて、その金額の範囲内で仕事をさせて頂くと言う柔軟性をお持ちなのである。何かをお願いしたり、教えて頂く立場としてはこのような柔軟性は非常に有り難い。白尾氏が、お客様を増やしている所以であろう。

白尾氏の別のユニークなアイディアの例としては、SOHO が騒がれる以前から、家庭内における主婦の労働力の有効利用を訴えていらっしゃったことがあげられる。実は日本の地図データの入力作業は、海外で行われることが多い。これは一般に、海外の方が人件費が安く済むからである。しかし、白尾氏はこの傾向に疑問を呈している。基本となるインフラストラクチャーのデータ入力を海外に委ねるのは、望ましい状態ではないということである。しかしデータ入力作業そのものは、ローコストで行わなければいけない。その解決策として、「家庭内における主婦の労働力を上手く生かすべきだ。」と提案していらっしゃるのである。

その理由としては、家庭内へのPCの普及や女性の高学歴化及び主婦の勤労意欲の向上などの追い風があることは言うまでもない。無論、地図のデータ入力にはある程度の技術力が必要であり、その意味で素人の主婦にやらせる訳にはいかない。しかし、チーフリーダーとなる主婦を決めておき、そこを出発点として主婦のネットワークを、徐々に広げていければ、終には大きな処理力を持つ地図データ入力組織が、出来上がるのである。SOHO が今のように騒がれる以前から、白尾氏はこのようなアイデアを持っていらっしやっただ。「うまい」と思うと同時に、素晴らしい先見の明だと思う。と同時に白尾氏の会社自身で、主婦ネットワークによるデータ入力業務を請け負っていらっしやる。アイデアだけでなく、実行力もお持ちなのだ。白尾氏自身は「おばちゃん入力」と笑って謙遜なさっているが、どうしてどうして中々の成果を上げている様である。

また白尾氏は、会社を越えた発想をなさる方である。10年以上前から測量・地図業界全体を心配し、若い技術者をどう定着させるかに心を砕いていらっしやっただ。給料など待遇の面を改善することで、若い技術者を定着させて行かないと、測量・地図業界の技術が向上しないのではないかと心配していらっしやっただのだ。その為、早くから測量・地図専門の研究機関を作る必要性を説いていらっしやっただ。今日、大手測量会社が、研究センターを持っていることから見ても、白尾氏の先見の明が伺える。

この研究センターの設立に向けての白尾氏の戦略は、ここで詳らかにすることは出来ないが、極めて大胆な戦術であった。それ以来、私は白尾氏のことを、極めて大胆不敵な、肝っ魂の据わった方であると言う点でも尊敬している。

以上3名の方を紹介させて頂いた。この方達は、経歴も得意分野も行動パターンも或いは興味の対象も三者三様である。しかし、皆さん、見習いたい点、真似したい点をお持ちなことは共通である。私は、これらの方とお付き合い出来ることを、嬉しく誇りに思っている。